

ロクーン実験における警備概況

小 松 正 幸

青森実験場におけるロクーン実験も 34 年 7 月・10 月、35 年 10 月、今回 (36 年 6 月) と回を重ねてきたので、警備方法についてもほぼ基本線が定まってきたと思われる、前回に比して特に変わった点はないが一応今回の実験における警備状況について報告する。

借地面積は従前どおり海岸線に沿って長さ 2,000 m、幅 300 m の 600,000 m² である。警戒線は西側を植林地帯、東側は海岸線とし、南北はそれぞれ放球点より 100 m の位置になわ張りをした。

警備に関する打合せは、6 月 9 日午前 9 時より八戸海上保安部に航空局三沢航空保安事務所代表も参加して海上の警備および通信連絡について、また陸上警備については午後 3 時から青森県庁にて、青森県土木部監理課・商工課・林務課・漁政課・県警察本部警ら交通課・野辺地警察署・青森地方気象台の各代表の出席を得て行なわれたが、その結果は次の通りである。

(1) 海上警備

海上保安部より SE ノート青森 No. 16 により関係方面へ警戒水域を周知させる。この場合の警戒水域は SE ノート記載の沖合 60 km 線より 40 km×60 km の長方形とするが、巡視船の警戒範囲は半径 25 km の円水域を実験前日の告示の際に通知する。海上警備の通信連絡の方法は生研の無線機を八戸海上保安部通信所に持ち込み、実験班本部と海上保安部間の連絡をし、巡視船へ中継してもらうこととした。同時にオペレーターも海上保安部職員に依頼した。

(2) 陸上警備

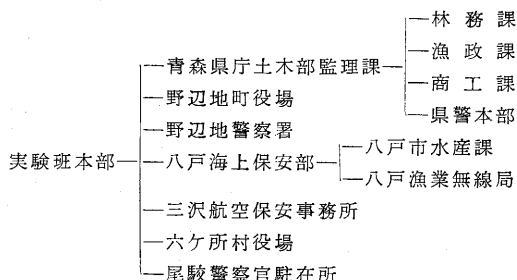
警官は野辺地警察署より 4 名派遣され、警備補助員は実験班で 10 名備い上げる。当日飛揚時刻の 2 時間前までに現場へ到着する。

(3) 火薬の貯蔵

前回に準じて庫外一時貯蔵とし梱包のままテント内に存置し、夜間は警備員 2 名を置くことで貯蔵許可を受ける。貯蔵場所と他の物件との保安距離に注意する。

(4) 告示について

実験前日の午後 3 時までに告示を行なう。実験予定日に行なわぬ場合は前日必ず中止の告示をする。告示先は次の通りとする。



(5) そ の 他

救護班として町立野辺地病院に看護婦を 1 名、実験日に派遣方依頼した。

気象関係は青森地方気象台にお願いして、気象班 (気象庁高層課) が電話により秋田の高層観測資料と気象情報を受けるようにした。

報道班に対しては昨年同様テントの一部を控席とし、実験に支障のない限り自由に取材してもらうが、水素を扱う時間中およびロケットをランニングする場合はラインを引いてそれ以上接近しないよう制限した。

警備に関する概要は以上の通りであるが、宿舎および輸送に関して、今回は前回の経験から早期の実験を予定したので、尾駁の旅館に収容可能な限りつめこみ、比較的遅く現場へ到着してもよい人 (タイムスケジュールの途中から作業する班) を野辺地町宿泊とした。野辺地—実験場間の輸送については、備上げのバスによる予定であったが、バス会社では午前 5 時 30 分以前には運転できないとのことで、実験予定日はタクシーによる輸送に切り換えた。

その他、八戸海上保安部における打合せの際、今回の落下予想水域は前回より南へよっているので巡視船は 6 時間位で現場へ到着できる。また現在漁船は少なく釧路—八戸航路の船だけマークすればよいので時期的に非常によいとのことであった。

終わりに実験に当たって種々ご協力をいただいた青森県庁・青森県警察本部・青森地方気象台・野辺地警察署・野辺地町役場・野辺地病院・六ヶ所村役場・八戸海上保安部の方々に深く感謝する次第である。

(1961 年 12 月 7 日受理)